京都府

食洗機からみる世界の水事情

京都先端科学大学附属中学校　三年
田口　宗暉

我が家の目下の悩みは「食洗機を購入するか否か」である。皿洗いが当番制で、洗うのが面倒くさい僕にとっては、是非購入して欲しいところだが、母曰く、購入目的は「時短」と「節水」らしい。

家族六人分の一般的な一度の食事で使う食器を手洗いすると、一度に約八十八リットルもの水を使用するという。日本の技術は凄いもので、食洗機を使用すると、これが九リットルまで節水できるという。

これだけ聞くと、すぐ購入以外の選択肢がないように思うが、そもそもこれは水道普及率が九十七パーセント以上の日本だからこそできることであって、世界を見渡せば、決してこんな贅沢な悩みをいっている場合ではないのが現状だ。

エチオピアでは、僕と同年代の女の子が、一日の内、約八時間もの時間を水の確保に充てなければならないという。しかも、それだけの時間をかけても確保できるのは、たった五リットル程。そしてその水は、茶色く濁っていて、まるで泥水のような状態なのだ。見るからに不衛生なこの水を、命をつなぐためには飲まざるを得ず、それが原因で下痢症を発症したり、コレラや腸チフス、赤痢などの感染症を引き起こす原因となっている。

実はこの赤痢という病気、昭和三十年代には、日本国内でも年間約九万人もの感染者が発生しており、中には命を落とす者もいたという。当時の日本における水道普及率は三十パーセントであり、現在の九十七パーセントという世界的に見ても高い普及率になるまでには、約四十年の歳月と、莫大な投資が必要だったわけだ。そしてそのおかげで、日本ではそのような感染症にかかる心配もなくなりいつしか「安心安全な水が常に手に入る」ことが当たり前になっていった。

一日に約三百リットルの水を使用している私たちに対して、途上国の人々は一日約五十リットル以下で生活していると言われている。この数字だけを見ると、なんて水の無駄使いをしているのだろうか、日本人は水に対しての意識が低いなぁと思ってしまう。

けれど、下水処理は勿論のこと、工場排水で河川をむやみに汚染しないよう、適切な排水処理技術が確立されているし、雨水や排水のリサイクル技術も盛んで、限りある水資源を有効活用すべく、今もなお、研究や開発が続いている。決して、水に対して意識が低いわけではなく、水が身近で当たり前なものであるからこそ、大切に使う意識が芽生え、それが今の日本におけるインフラ設備を支え、より効率的な水資源の確保につながっていると考えるべきだろう。

発展途上国でも、日本と同じ様に四十年の歳月と莫大な投資を行えば、水道普及率が大幅に改善するのかと問われれば、その答えはきっとＮＯである。

時間とお金をかければ解決できる問題ならば、とっくの昔に世界中の水道普及率は上がっているはずなのだから、どれだけ複雑で一筋縄ではいかない問題なのかが現状から垣間見える。

先進国が途上国に出来る水の支援は、最近技術の提供や資金の提供だけではなく、それぞれの社会に見合う適正な技術を駆使してシステムを構築することであり、たとえ小さく貧しいコミュニティであったとしても、水道施設を建設した後に、適正に運営できる仕組みづくりなども必要になってくるだろう。

近年よく耳にするようになったＳＤＧｓの六番目には、「安全な水とトイレを世界中に」と掲げられているが、まずは僕が自分でできることとして、母にこっそり伝えようと思う。

「食洗機、買うべきだと思うよ。」

と。自分にできる小さな一歩が、きっと世界を少しずつ変えていけると思うから。